



Title	人肝における好酸体及び肝細胞のその他の好酸性変性の形態学的研究
Author(s)	松岡, 建造
Citation	大阪大学, 1969, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/29969">https://hdl.handle.net/11094/29969</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	まつ 松	おか 岡	けん 建	ぞう 造
学位の種類	医	学	博	士
学位記番号	第	1808	号	
学位授与の日付	昭和44年9月16日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
学位論文題目	人肝における好酸体及び肝細胞のその他の好酸性変性の形態学的研究			
論文審査委員	(主査) 教 授 西川 光夫			
	(副査) 教 授 阿部 裕 教 授 浜 清			

## 論 文 内 容 の 要 旨

## 〔目的〕

肝疾患にみられる肝細胞変性の一つに好酸性変性がある。この変性の一つとみられるのが好酸体 (acidophilic body) と呼ばれるものである。この変化は肝生検法の普及とともに初めて注目されてきた組織像であるために、今までに十分な研究が行なわれていない。特に好酸体の細胞性起源及び従来いわれていた暗調細胞 (dark cell) との関係についても未解決のままである。又人の肝炎ビールスが同定されていない現在ビールス肝炎とそうでないものとの間に微細構造上、好酸体に特異な形態が認められるか否かを知ることは極めて重要であると考えられる。このような観点から本研究では ①好酸体の細胞性起源及びその発生機序、②好酸体には微細構造上、各種肝疾患に特徴的な所見が認められるかどうか、③好酸体以外の肝細胞の好酸性変性との微細構造上の鑑別点、を明らかにすることを目的とした。

## 〔方 法〕

各種肝疾患86例の針生検肝を材料とした。対照例 (5例: 肝機能検査及び組織学的所見上著変なきもの)

光顕的には10%中性ホルマリン及びカルノア液固定、パラフィン包埋を行なった。切片は hematoxylin and eosin (H-E), toluidin blue (T-B) その他により染色した。

電顕的には生検直後の肝の一部を、約  $1\text{mm}^3$  大に細切して、0~4°C で1%オスミウム酸固定 (Caulfield 液: 2 hrs) 又は4% glutaraldehyde (前固定: 2 hrs) と1%オスミウム酸 (後固定: 2 hrs) による二重固定後、アルコール脱水、epon 包埋を行なった。超薄切片は水酸化鉛又は酢酸ウラニルと水酸化鉛による電子染色を行なって、HU-11B型電子顕微鏡で観察した。

尚 epon 包埋材料から厚さ約  $1\mu$  の光顕用切片 (以下T切片と略す) を作製し、T-B 染色を

行なって、光顕と電顕の所見を対比した。

### 〔成 績〕

#### A) 好 酸 体

##### 1) 光顕的所見

光顕的には先人のすでに記載せるものとほぼ同様な観察所見をえた。特記すべき所見として、好酸体の他に、胞体全体が eosin に濃染した肝細胞が散見された。このものは T-B にも濃染して認められ、本研究では、このような濃染肝細胞を暗調細胞と呼称した。暗調細胞の中には胞体の一部が Disse 腔に突出したものが認められ、好酸体との間に密接な関係のあることが示唆された。

##### 2) 電顕的所見

- a) 好酸体は橢円ないし不整な形を呈して類洞内に認められた。胞体内には種々の程度に変性した核及び肝細胞の保有するほとんど全ての細胞小器官が密集して認められた。又胞体の基質の electron density は著しく高まっていた。
- b) 好酸体は全て貧食細胞の偽足によりとりかこまれるか又は完全に貧食されていた。
- c) 暗調細胞と好酸体との間に移行像が認められた。すなわち暗調細胞は好酸体と同様に胞体の基質の electron density が著しく高まっており、肝細胞索内に整然と配列して核及び細胞小器官にほとんど変性の認められないものや、胞体の一部が Disse 腔に突出したもの及び大部分の胞体がすでに類洞内にはみ出し、一部分のみが主として毛細胆管を含む面で肝細胞索と付着したものが認められ、突出度が強いものほど核及び細胞小器官の変性が強まっていた。

#### B) 好酸体以外の肝細胞の好酸性変性

- 1) 障害肝では非特異的に核の一側又は核の周囲が eosin に濃染し、その他の部分が明るい肝細胞が散見された。電顕的には濃染部分に一致して、糸粒体を中心とした細胞小器官が密集し、明るい部分に一致して glycogen 顆粒が集積していた。
- 2) 急性肝炎や中毒性肝炎にみられた広範な凝固壊死部分は一様に濃染しており、電顕的には肝細胞及び内皮細胞が全て一様に変性して、electron density が著しく高まっていた。
- 3) アルコール性肝硬変症の 3 例にアルコール硝子体 (alcoholic hyaline) を認めた。電顕的には変性した糸粒体から特異な構造を示すに致ったと考えられる所見をえた。
- 4) 急性肝炎の 1 例に T 切片の T-B 染色上好酸体とほとんど区別のつかない細胞が認められた。微細構造上胞体内はほとんど肝細胞性の糸粒体のみでしめられた特異な形態を示していた。

### 〔総 括〕

- 1) 好酸体は肝細胞起源であり、暗調細胞が 1 個全体として壊死におちいり、肝細胞索より Disse 腔更には類洞内に脱落して、貪食細胞により貪食されたものである。
- 2) 好酸体には微細構造上各種肝疾患に特異的な所見は認められなかった。殊に臨床的並びに組織学的に明らかにビールス肝炎と考えられる症例において観察された好酸体内にビールス様顆

粒は全く認められなかった。

- 3) 光顕上好酸体とよくにた肝細胞の好酸性変性について検索した結果、それらは好酸体の発生機序とは全く異なっており、微細構造上それぞれ特徴ある所見を有していた。

### 論文の審査結果の要旨

各種肝疾患86例の針生検肝を材料として、光顕的に観察した同一細胞について電顕的観察を行なうようにして、好酸体の形態学的研究を行ない以下の三点を明らかにした。

- 1) 好酸体は、肝細胞起源であり、暗調細胞が、1個全体として壊死におちいり、肝細胞索よりDisse腔更には類洞内に脱落して、貪食細胞により貪食されたものである。
- 2) 好酸体には微細構造上各種肝疾患に特異的な所見は認められなかった。
- 3) 好酸体以外の肝細胞の好酸性変性は、好酸体の発生機序とは全く異なっており、微細構造上好酸体とは容易に鑑別された。